

タマン語の系統再考

藤原 敬介

【要旨】 本稿では、Brown [1911] に記録された 75 項目のタマン語語彙資料を再検討する。さらに、ほぼ最後とみられる話者から採集した数語の語彙資料も活用し、チベット・ビルマ語派におけるタマン語の位置について考察する。調査の結果、以下の諸点があきらかとなった。

1. タマン語の音素としては/a, e, ε, i, i, v, o [ɔ, a], u, ə; p, p^h, t, t^h, c [ts, tʃ], k, m, n, ŋ, r, l, s (s^h), ʃ, x, h, w (v), y/が推定される。
2. PTB からの改新としては、低母音の上昇 (*-a > *-ɔ)、軟口蓋閉鎖音の語頭における摩擦音化 (*k- > x-)、語末における消失 (*-ak > -a)、高母音のあとでの付加 (*-i > *-ik > -ek, *-u > *-uk > -ouk)、*gry-の破擦音化 (*gry- > c-) が特徴的である。
3. ルイ語群に特徴的な語彙として否定接頭辞、「置く」、「行く」などがみられる。また、「太陽」の構成要素に「目」をもつ点もルイ語群の改新である。ただし、ルイ語群であると決定づける証拠はない。
4. 東北インドからビルマにかけて分布するさまざまな TB 系諸言語と共有する語彙が散見される。各語群をむすびつける「繋聯言語」とかんがえられる。

キーワード: タマン語、チベット・ビルマ語派、ルイ語群、比較言語学、繋聯言語

0 はじめに

本稿では、Brown [1911] に記録された 75 項目のタマン語 (Taman) 語彙資料を再検討する。さらに、ほぼ最後とみられる話者から採集した数語の語彙資料も活用し、チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman: 以下 TB と略す) におけるタマン語の位置を考察することを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。**1** ではタマン語とタマン人について概況をのべ、先行研究についてふれる。**2** ではタマン語の音韻論を再検討する。**3** ではタマン語の語彙を近隣諸語と比較する。**4** ではタマン語の新資料を提示し、分析する。**5** では本稿をまとめ、今後の課題についてのべる。本稿末尾に**記号一覧**と、本稿で言及する**言語名一覧**をしめす。さらに、**附録 1** として Brown [1911] にしめされるタマン語を再掲し、他の TB 諸語と比較した資料を提示する。**附録 2** として、**4** で提示した新資料のうち、タマン語による歌を採譜したものを掲載する。**附録 3** として TB 諸語の系統樹をしめす。

1 タマン語とタマン人

1.1 タマン語とは

タマン語とは、TB に属する言語である。タマン人は、上ビルマ・ホーマリン (Homalin) 地方のタマンディ (Htamanthi^{注1}) 村近辺に居住している。ただし Lewis et al. [2016] によると、タマン語の最後の話者は 1990 年代にいなかった。資料は、上ビルマ・チンドウイン地方に赴任していたイギリス人行政官である R. Grant Brown によって記録された 75 項目^{注2}の語彙資料をふくむ Brown [1911] のみである^{注3}。

Brown [1911: 312] によると、タマン語と非常によく似た言語にマリン語 (Malin) がある。ただし、マリン語そのものについての言語資料はしられていない^{注4}。

1.2 タマン人とは

タマン語自体はほぼ死語である。しかし、民族意識としてみずからをタマン人であるとかんがえている人々は今も存在する。タマン人はタイ系のシャン人と同一視され

^{注1} 現地のタイ・ナイン人によると、この地名はタイ・ナイン語で t^ham³ ‘cave’ + mon³ ‘be happy’ + s^hɿ¹ ‘tiger’ 「虎がたのしくらす洞窟」という意味らしい (筆者はタイ・ナイン語の形式を正確に表記することができない。ここでは便宜的に、分節音が語源的に対応するシャン語の形式でしめした。タイ・ナイン語とは声調と母音にちがいがあると推定される)。なお、タマンディという地名はビルマ語では ၵမံၼ်ထီၼ် [t^həman³ði] と表記され、一般に Htamanthi とローマ字表記される。ただし、ビルマ文字の無声有気音は無声無気音としてローマ字転写されることもある。だから Brown [1911] では Tamanthi と表記されている。タマン人に対して Taman という表記が通用しているのも、同様の理由による。

^{注2} このうち #38 ‘female’ と #59 ‘mother’ は同形 (#42 ‘give’ は同音異義)、#62 ‘river’ と #73 ‘water’ は同一語、#64 ‘rock’ と #69 ‘star’ がおそらく同一語である。したがって、実質的には 72 項目である。

^{注3} Luce [1985] にもタマン語資料がある。ただし、語例をみるかぎり Brown [1911] の表記を変更しただけのものである。Brown [1911] にあって Luce [1985] にないものは #11 ‘ape’、#28 ‘call’、#34 ‘eat’、#54 ‘kill’、#55 ‘know’、#62 ‘river’、#67 ‘silk’、#68 ‘speak’、#74 ‘write’ の 9 語である。詳細は附録 1 を参照。なお、Brown [1913: 34] には参考資料として “File 2P.-21 of 1911, Taman and Malin vocabularies” というものがあがる。この資料が現在どこにあるかは不明である。

^{注4} 筆者が 2015 年 3 月 1 日にマリン村を訪問したところ、民族としてのマリン人は存在していた。だが、マリン語話者はすでに存在していなかった。ただし、この村の僧院の僧院長でホーマリン出身のタイ・ナイン人のお坊さんによると、かつてマリン人の寺男がいた。そして、その寺男が発音していた「ジャックフルーツ」に相当するマリン語の単語をお坊さんは記憶していた。[lək^hùɛi] と発音していたらしい。タイ・ナイン語では mak²məlaaŋ⁴ であるようだ。なお、マリンとは、タイ・ナイン語で maan³ ‘village’ + laaŋ⁴ ‘watch tower’ 「見張り台の村」という意味であるという。

ることあるけれども、タマン人とシャン人とは言語も文化も異なる [Brown 1913: 30–31]。タマン人は現在では日常的にはタイ・ナイン語やビルマ語をはなす。タマン人は「虎に変身」する民族として現地ではいられている。しかし、Brown [1911: 306] によると、当時すでに「虎に変身」できるタマン人はいなかったそうである。

1.3 先行研究

タマン語の TB での位置については、(1) にしめす見解がある。Brown [1911] 以外は、どの論者も結論をのべるだけであり、具体例をほとんどしめていない。

- (1) a. Brown [1911: 311–312] : さまざまな言語の特徴がみられ、特にどの言語群とちかいかはきめられない。
- b. Lowis [1919: 26] : 民族的にはカドゥー人と関係しているかもしれない。
- c. Benedict [1972: 5–6] : ルイ語群 (Luish) やジンポー語とつよい関係にある。
- d. Shafer [1974: 5] : 十分な資料がなければ帰属は決定できないが、ビルマ諸語の影響をつよくうけつつも、ルイ語群に特徴的な語彙が散見される。
- e. Lewis et al. [2016]、Glottolog 2.7^{注5}: ジンポー諸語に属する。
- f. STEDT Database: サック諸語 (Asakian^{注6}) に属する。

本稿での結論は Brown [1911] (1a) や Shafer [1974] (1d) にちかい。ただし本稿では、Brown [1911] よりもおおくの根拠をしめしながら、TB におけるタマン語の位置を考察していく。なお、本稿では音と語彙の比較を中心とし、文法についてはあつかわない。

^{注5} <http://glottolog.org/> (最終確認 2016 年 9 月 2 日)

^{注6} Matisoff [2013b: 25] による造語。系統的にはおおむね Tibeto-Burman > Jingpho-Asakian > Asakian という関係にある。Grierson [1904] や Benedict [1972] などルイ語群とよばれていたものとおなじ言語群をさす。「ルイ」という名称がメイティ語で ‘slave or dependent’ [Damant 1880: 240] であり、言語名として適当ではないという理由から、チャック人やカドゥー人の自称にふくまれる Sak をもとにして Asakian と造語した。「ルイ (Lois)」という名称の由来については Devi [2002: 17–20] にくわしい解説がある。Devi [2002] によるとルイには三種類の意味がある。すなわち (A) ‘Lanngam Loi’ (conquered one), (B) ‘Lanpha Loi’ (captured from war and rehabilitated by the king), (C) ‘Loi-tharakpa’ (put into exile) である。このうち (B, C) については、アンドロ人やセンマイ人の居住地が流刑地などであったことがないので、おそらく該当しないとされる。すなわち、(A) の意味が「ルイ民族」としての本来的な意味であったとされる。そして、のちにメイティ人がヒンドゥー教を受容したさい、ヒンドゥー教を受容しなかった民族が「ルイ」とよばれるようになり、メイティ人の王に税をおさめるようになったという。

2 音韻論

Brown [1911] によるタマン語の表記は音声表記である。ただし、音素分析されているわけではない。また、実際の音価が推定しにくいものもある。75 項目のかぎられた語彙から確認されることをのべる。

2.1 音節構造

タマン語の音節構造は (2) のとおり^{注7}。C₁ には {p (b), p^h, t, t^h, ts (tf), k, m, n, ŋ, r, l, s (s^h), ʃ, x, h, w (v), y} すべての子音が、C₂ には {p, k, m, n, ŋ} が、G には {w} のみが、V には {a, e, è, i, ì, ɔ, ɑ, ɐ, ò, u, ù, ë, ə} が確認される。

(2) C₁GVC₂

2.2 子音

表 1 は Brown [1911] にあがる語例から抽出し、筆者の解釈により音素となりうる子音をしめしたものである。★ 語末子音として可能、★★ 介子音として可能であることをしめす。(…) にいれたものは Brown [1911] に音声表記されるけれども、筆者の解釈では異音であり、音素ではないことをしめす。表中で特記すべき点は、(A) k^h ではなく x が音素となっている、(B) 祖語の *gry- が c- で対応している、という点である。

表 1 タマン語の子音

	唇音	歯音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	p [★] (b) p ^h	t t ^h	ts (tf)	k [★]	
摩擦音	(v)	s s ^h	ʃ	x	h
鼻音	m [★]	n [★]		ŋ [★]	
流音		l r			
半子音	w ^{★★}		y		

以下に子音の代表例をあげる。

- (3) a. {p} /p/ < PTB *b-, *-p
 #4 ‘four’ Ta pəli; PTB *b-ləy (STEDT #2409)
 #66 ‘snake’; Ta pɛ; PTB *bəw (STEDT #2178)
 #18 ‘bear’; Ta s^hap; PLu *k^h-sap^{注8}

^{注7} 以下、{...} で表記されるものは Brown [1911] による音声表記である。

^{注8} PLu にみられる ^h は有気音ではない。高声調要素であることをしめす。

- b. {b}^{注9} /p/
 #12 ‘bag’; Ta **t^humbɔ**; TL **t^hoŋ¹**
- c. {p’} /p^h/ < PTB *b-, *p-
 ‘arrow’; Ta **p^həlo**; PTB ***g/b/m-la-y** (STEDT #2386)
 ‘ear’; Ta **nəp^hɑ**; PTB ***r-pak** (STEDT #821)
- (4) a. {t}^{注10} /t/ < PTB *d-
 #9 ‘nine’; Ta **təxɐ**; PTB ***d/s-kəw** (STEDT #2364)
- b. {t’} /t^h/ < PTB *t-
 ‘water’; Ta **t^hi**; PTB ***m-t(w)əy-n** ≧ ***m-ti-s** (STEDT #298)
- (5) a. {k} /k/ < PTB *g-, *k^{注11}
 #47 ‘head’; Ta **kəkɐ**; PTB ***m/s-gaw** (STEDT #386)
 #36 ‘eye’; Ta **pekkwe**; PTB ***s-mik** (STEDT #682)
- b. {x}^{注12} /x/ < PTB *k-
 ‘bitter’; Ta **xɔ**; PTB ***b-ka-(n/m/ŋ)** (STEDT #229)
- (6) a. {ts} /ts/ (c) < PTB *ry-(?), PLu *c-
 #65 ‘salt’; Ta **tsùm**; PTB ***g-ryum** (STEDT #2644) cf. PLu ***cim(?)** < ***ryum(?)**
 #40 ‘fish’; Ta **ətsɔ**; PTB — cf. PQ ***r-dzwa** (STEDT #5673)
- b. {tʃ}^{注13} /ts/(?) < PTB ?, PLu *c-
 #21 ‘bird’; Ta **kətfeksɔ**; PTB — cf. PLu ***u-cik-sa**

^{注9} bはこの一例のみ。他の有声閉鎖音がなく、鼻子音のあとという位置も考慮すると、無声閉鎖音が有声化したとかがえられる。閉鎖音類に有声と無声の対立がないことは、シャン語やルイ語群の特徴でもある。

^{注10} 音節末に-tをもつ語がない。このことは、(12b) でしめすように、祖形の*-at が-e で対応することと相関する。

^{注11} 音節末の-k については、*i のあとで二次的に付加する例もある。注22 を参照。

^{注12} *k- > *k^h- > x- という変化があったと推定される。

^{注13} {tʃ} は前舌母音の前にあらわれる傾向にある（ただし#55 ‘know’ tʃùp は例外）。後舌母音のあとでのみあらわれる {ts} とほぼ相補分布し、同一音素にまとめうる。

- (7) a. {s}^{注14} /s/ < PTB *s-, PLu *s-
 #3 ‘three’; Ta **sùm**; PTB ***g-sum** (STEDT #2666)
 #34 ‘eat’; Ta **sɔ**; PTB *dz(y)a-k/n/t/s (STEDT #36) cf. PLu ***sa**
 #58 ‘moon’; Ta **səlo**; PTB ***s-(g)la** (STEDT #1016)
- b. {s'} /s^h/ < PTB *s-
 #23 ‘blood’; Ta **s^he**; PTB **s-hywəy-t** (STEDT #230)
- c. {ʃ} /ʃ/ < PTB *tsy-
 #53 ‘iron’; Ta **ʃa**; PTB ***l-tsyak** (STEDT #6365: provisional)
- d. {h} /h/ < PTB ?, PLu *h-
 #43 ‘go’; Ta **ho**; PTB *s-wa BE IN MOTION, GO, COME (STEDT #2774)
 cf. ‘walk/bring’ PLu ***ha**
- (8) a. {m} /m/ < PTB *m-, *-m
 #27 ‘buffalo’; Ta **mɔk**; PTB ***muk** CATTLE (STEDT #5607)
 #3 ‘three’; Ta **sùm**; PTB ***g-sum** (STEDT #2666)
- b. {n} /n/ < PTB *n-, *-ŋ(?)^{注15}
 #2 ‘two’; Ta **nek**; PTB *g/s-**ni**-s (STEDT #2504)
 #11 ‘ape’; Ta **jùm**; PTB ***ywaŋ** (STEDT #6049)
- c. {ŋ} /ŋ/ < PTB *ŋ-, *-ŋ
 #5 ‘five’; Ta **məŋɔ**; PTB ***l/b-ŋa** (STEDT #1306)
 #26 ‘bone’; Ta **raŋ**; PTB *g-r(w/y)a(**ŋ**/k) (STEDT #238)
- (9) a. {l} /l/ < PTB *l-
 #63 ‘road’; Ta **lam**; PTB ***lam** (STEDT #1017)
- b. {r} /r/ < PTB *r-
 #26 ‘bone’; Ta **raŋ**; PTB *g-r(w/y)a(**ŋ**/k) (STEDT #238)

^{注14} タマン語周辺の TB で /c/ と /s/ と /s^h/ が対立する言語は、管見のかぎりでは存在しない。チャック語のように /c/ と /s/ が対立するか、ビルマ語やカドゥー語、ガナン語のように /s/ と /s^h/ が対立することが一般的である。PTB の *s- が Ta で s- または s^h- で対応する事実から判断して、両者は同一の音素にまとめる。なお、[s] と [s^h] の区別をしらない話者にとっては、両者はおなじように聞こえるために、混同が生じている可能性もある。

^{注15} 音節末に -n がくるものは二例しか確認されない。そのうち同源形式があきらかなものは #11 ‘ape’ のみである。

- (10) a. {w}^{注16} /w/ < PTB *w-
 #37 ‘father’; Ta **vɔ**, **wɔ**; PTB ***wa** (STEDT #5484)
 #6 ‘six’; Ta **kwa**; PLu *k-ruk, PTB *d-k-ruk (STEDT #2621)
 b. {j} /y/ < PTB *y-
 #11 ‘ape’; Ta **jùn**; PTB ***ywaŋ** (STEDT #6049)

2.3 母音

Brown [1911: 312–313] による母音の解説のうち、タマン語の形式として実際に確認されるものは次のとおりである。ただし、‘’ が下降調をあらわすとかんがえても、数がおおすぎる。音素としてはまとめるものをふくんでいる。

- | | | |
|---------------------------------------|------------------------------------|-------------------------------------|
| • a: F. <i>patte</i> , <i>part</i> | • i ^{注18} : E. <i>it</i> | • ɔ: E. <i>paw</i> , F. <i>note</i> |
| • a ^{注17} : E. <i>father</i> | • u: E. <i>rule</i> | • ɔ̃ ^{注20} : E. <i>not</i> |
| • e: F. <i>les</i> | • ù ^{注19} : E. <i>put</i> | • ë: 中舌母音 ^{注21} |
| • è: E. <i>men</i> | • ə: E. <i>amiss</i> | |
| • i: E. <i>machine</i> | • ɐ: E. <i>burn</i> | |

母音については PTB との対応を網羅的にあげることが困難である。代表的な対応例を以下にあげる。

- (11) a. {a} /a/ < PTB *-ak
 #12 ‘arm, hand’; Ta **la**; PTB ***lak** (STEDT #695)
 b. {u} /u/ < PTB *-u
 #25 ‘body’; Ta **tu**; PTB ***du** (STEDT #14) cf. TL **to**¹

^{注16} {w} と {v} は自由に交替するので、本稿では/w/を音素と解釈する。TB で両者を音素とする言語は一般にはない。なお、チャック語では両者が音素であるけれども、w は原則として借用語にのみあらわれる。

^{注17} Brown [1911: 312] による表記はギリシャ文字の Ω ににている ⟨Ω⟩ である。ただし、他の語例での印刷から判断するかぎりでは、α で代用して問題ないとおもわれる。

^{注18} C{i}C または V{i}C という環境でのみ確認される。{i} と相補分布しているので、音素としては一つにまとめる。

^{注19} C{ù}C または {ù}VC という環境でのみ確認される。{u} と相補分布しているので、音素としては一つにまとめる。

^{注20} Brown [1911: 313–315] の語例には {ò} があがるのみで、{ɔ̃} はみられない。そして {ò} があらわれる環境は {òùŋ/n} のみである。音素としては {ɔ̃} と一つにまとめる。

^{注21} “a sound apparently partaking of *e* and *ɐ*, as defined above; approaching the F. *peu*, but formed quite differently, with the lips loose.” [Brown 1911: 313]

- (12) a. {e} /e/ < PTB *-i, *-əy-t
 #2 ‘two’; Ta nek^{注22}; PTB *g/s-ni-s (STEDT #2504)
 #23 ‘blood’; Ta s^he; PTB s-hywəy-t (STEDT #230)
 b. {è} /ɛ/(?) < PTB/PLu *-al(?), *-at(?)
 #39 ‘fire’; Ta vè; PTB *b^war ≈ *p^war (STEDT #2152) cf. PLu *wal
 #8 ‘eight’; Ta pəsè; PTB *b-r-gyat ≈ *b-g-ryat (STEDT #2259) cf. PLu *cat
- (13) a. {ɔ} /o/ < PTB *-a
 #5 ‘five’; Ta məŋɔ; PTB *l/b-ŋa (STEDT #1306)
 b. {a}^{注23} /o/ < PTB *-a
 #72 ‘tooth’; Ta vakòùn, wakòùn; PTB *s/p-wa (STEDT #632)
 c. {e} /e/ < PTB *-əw, PLu *-u(w)
 #66 ‘snake’; Ta pɛ; PTB *bəw (STEDT #2178) cf. PLu *k-phúw
 #9 ‘nine’; Ta tɔxɛ; PTB *d/s-kəw (STEDT #2364)
- (14) a. {i} /i/ < PTB *-i(y), *-əy
 #10 ‘ten’; Ta fi; PTB *ts(y)i(y) ~ *tsyay (STEDT #2748) cf. PLu *cí, *sí
 b. {ë}^{注24} /i/(?) < PTB *-ay(?), *-um(?)^{注25}
 #45 ‘good’; Ta kəmə; PTB *mway (STEDT #2457) cf. PLu *méy
 #38 ‘female’; Ta nēm; PTB *s-nam (STEDT #2486) cf. J num³³ ‘woman’
 #42 ‘give’; Ta nēm; PTB — cf. Chairel num
- (15) {ə} /ə/: CəCV(C) の環境でのみあらわれる。
 #9 ‘nine’; Ta tɔxɛ; PTB *d/s-kəw (STEDT #2364)

以上をまとめると、表 2 のようになる。

^{注22} e のあとで祖形によらない k があるとき、母音は*-i にさかのぼる。*i のあとで k が付加したあとで、*i から e への変化があったと推定される。平行例に#29 ‘cat’、#56 ‘man’、#74 ‘write’ がある。高母音のあとでの閉鎖音付加についてはチャクバ語やガナン語にもみられる。Mortensen [2004, 2012a] がしめすように、東北インドから上ビルマの諸言語にみられるだけでなく、通言語的にも散見される。なお、類似した音変化は、たとえばビルマ語においても通時的にみられる。ビルマ語では*-iy から-e への変化がしられている[Nishi 1999: 39]。また、*-u のあとで k が付加したとみられる例として#50 ‘horse’ がある。

^{注23} PTB *-a 由来であると明白な例から判断して、{ɔ} と {a} はひとつの音素にまとめうる。

^{注24} 語例がすくなく、確認される環境も m-と n-に限定される。{i} や {u} と相補分布しており、音素としてまとめられる可能性がある。

^{注25} ジンポー語とチャイレル語とで-um となるものが、Ta では-ēm で対応している。

表2 タマン語の代表的母音

Brown	{a}	{e}	{è}	{i}	{ë}	{o}	{ɑ}	{ɐ}	{u}	{ə}
本稿	/a/	/e/	/ɛ/(?)	/i/	/i/(?)	/o/	/o/	/ɐ/	/u/	/ə/
PTB	*-ak	*-i	*-al(?)	*-i(y)	*-ay(?)	*-a	*-a	*-əw	*-u	—
		*-əy-t	*-at(?)	*-əy	*-um(?)			*-uw		—

2.4 声調

TB 系では声調が弁別的である言語がおおい。だから、タマン語でも声調は弁別的であった可能性がたかい。Brown [1911: 313] では高声調に ‘ˊ’、低声調に ‘ˋ’、下降調に ‘ˊˋ’ をもちいと明記されている。ただし、実際には高声調の語例がなく、低声調も #73 ‘water’ の一例のみである。下降調として #3 ‘three’、#7 ‘seven’ など 10 語があがるものの最小対がなく、どの程度たたく声調を表記しているかは不明である^{注26}。

3 語彙の比較

本節ではタマン語の語彙を周辺言語と比較する。固有語の対応を明確にするために、まず借用語の対応についてのべる。ついで、タマン語周辺の TB 系諸言語と比較する。

3.1 借用語

タマン語が TB 系であることは基礎語彙の比較から確実である。したがって、タイ系のシャン語 (Shan, Tai Long: TL と略記) と共通する語彙は借用語であると推定される。ただし、タマン語と隣接する地域ではなされる言語はタイ・ナイン語であり、標準的なシャン語とは相違する音対応がある。(16) にタイ系言語からの借用語の例をあげる。

- (16) a. #15 ‘bag’; Ta t^hũmbɔ; TL t^hoŋ¹
b. #44 ‘gold’; Ta xɔm; TL k^ham⁴
c. #57 ‘male’; Ta laktfaŋ; TL luk³tsaaj⁴ ‘male child’
d. #67 ‘silk’^{注27}; Ta nè; TL laaj³ cf. J lai³³

^{注26} Luce [1985] によるタマン語資料では、アクセント記号が無視されている。

^{注27} ‘silk’ は ‘thread’ に通じ、Proto-Tai *ʔd- に由来する [Li 1977: 107–108]。そして、シャン語 (TL) の l- がタイ・ナイン語 (TN) では n- で対応すると推定される例である。Ta の形式は、直接的には TN からの借用とおもわれる。なお、タマン語とちかい関係にあるとされるジンポー語では l- で借用されている。この事実は、タマン語とジンポー語では、借用元のシャン語の種類が異なることを示唆する。

3.2 TB 諸語一般との比較

タマン語が TB 系であることは、TB 諸語で一般にみられる語彙との音対応からあきらかである。(17) に代表例をあげる。

- (17) a. #22 ‘bitter’; Ta xɔ; PTB *b-ka-(n/m/ŋ) (STEDT #229)
 b. #37 ‘father’; Ta vɔ ~ wɔ; PTB *wa (STEDT #5484) ≈ *p^wa (STEDT #2546)
 c. #63 ‘road’; Ta lam; PTB *lam (STEDT #1017)

Brown [1911] にあがる 75 項目の語彙のうち、シャン語からの借用語 4 語および実質的には同一項目とみなしうる 3 語を除外した 68 語のタマン語語彙を、タマン語と地理的に比較的ちかいところではなされる TB 諸語（ジンポー・ルイ語群の諸言語および PTani, PKC, PNN, PCN, PTk, PBG, PLB, PKar）と比較した。タマン語と同源形式とみなしうる語数を一致数にしたがって四群にわけてしめせば、(18) のとおりである^{注28}。

- (18) a. Jingpho 45/68 (66%)、PNN 44/68 (64%)
 b. PLu 43/68 (63%)、Sengmai 41/68 (60%)、Cak 40/68 (58%)、Andro 40/68 (58%)、Ganan 39/68 (57%)、Kadu 38/68 (55%)^{注29}
 c. PKC 33/68 (48%)、PLB 33/68 (48%)、PTk 30/68 (44%)
 d. PCN 29/68 (42%)、PBG 27/68 (39%)、PKar 25/68 (36%)、PTani 20/68 (29%)

(18) からは、ジンポー語と北ナガ祖語との類似度がもっともたかく、ルイ語群の諸言語がそれにつづいているとわかる。以下、特異な対応を中心に、タマン語と他語派との関係を検討する。

3.3 サル語群との比較

タマン語の周辺ではなされるジンポー語や北ナガ諸語、ルイ語群の諸言語は、TB のなかでもサル語群 (Sal languages: Burling [1983]) とよばれる言語群に属する。サル

^{注28} 同源形式であるかどうかは、附録 1 で同源形式を太字にしてしめた。また、一致数をかぞえる際には、全体的な一致も、部分的な一致も、おなじようにあつかった。たとえば #7 ‘seven’ において、チャック語やジンポー語はタマン語と全体的に一致する。他方、PKC は接頭辞部分のみが一致する。このような場合であっても、一致数としては、いずれの言語も同様に「1」として計算した。ここでしめす一致数はひとつの目安にすぎない。一致数の中身は、しばしばことになっている。

^{注29} ルイ語群の中で Kadu と Ganan の一致数がややひくい理由は、両言語では「五」以上の数詞がシャン語からの借用語になっているためである。

語群を特徴づける語彙としては (19) にあげる ‘sun’ と ‘fire’ があげられる^{注30}。

- (19) a. #71 ‘sun’ Ta *pupek*; PTB **tsyar*; J *džān*; Namsang (N.Naga) *san*, Moshang (N.Naga) *śar*; Garo (BG) *sal*; Crl *sal*; Luish C *cəmiʔ*, K/G *səmiʔ*, A/Se *camit*
 b. #39 ‘fire’ Ta *vè*; PTB **b^war* ≍ **p^war*; J *ʔwàn*; Namsang (N.Naga) *van*, Moshang (N.Naga) *var*; Garo (BG) *waʔl*; Crl *phal*; Luish C *vaiŋ*, K/G *wan*, A/Se *wal*

(19) において ‘fire’ はタマン語もサル語群の形式と同源形式である。しかし ‘sun’ は同源形式とはいえない^{注31}。

サル語群を特徴づける形式として、‘foot’ と ‘hand/arm’ の関係をさらにあげることができる。サル語群では一般に ‘foot’ と ‘hand/arm’ の相違が、語末における -k の有無にあらわれる。(20) にしめすように、タマン語の ‘hand/arm’ はサル語群と同源である。しかし ‘foot’ が確認されない。‘hand/arm’ が PTB と共通するものには、たとえばビルマ語 {*lak*} がある。ただし ‘foot’ は {*khre*} であり、サル語群には属さない。したがって、タマン語もサル語群に属するといえるかどうかはわからない^{注32}。

- (20) ‘foot’ vs. ‘hand/arm’ Ta — vs. *la* < **lak*; Crl *la* vs. *lak*; Luish PLu **ta* vs. **tak-*, C *ʔəta* vs. *taʔmiŋ* ‘nail’, K/G *ta* vs. *taʔmiŋ* ‘nail’, A/Se *ta-* vs. *takmeŋ* ‘nail’; BG Garo *dža* vs. *džak*, Dimasa *ya* vs. *yau*; N.Naga Tableng *ya* vs. *yak*, Tamlu *la* vs. *lak*, Banpara *tšia* vs. *tšak*, Namsang *da* vs. *dak*, Moshang *ya* vs. *yak*

(19) と (20) より、タマン語がサル語群に属する可能性はあるけれども、確実にサル語群に属するとまではいえない。

3.4 ルイ語群との比較

他の TB 諸語には (ほぼ) みられず、ルイ語群に特徴的といえる言語特徴としては (21) がある [藤原 2014a: 274 (12), 275 (17)]。

- (21) a. 入破音にかかわる語彙とその音対応

^{注30} (19) の語例は Benedict [1972: 7] にルイ語群の例を追加したものである。なお, Matisoff [2013b: 40–44] は Burling [1983] を再検討し、サル語群を特徴づける形式を吟味している。そして COOKING POT, MOTHER, PESTLE, SKY / RAIN の 4 語をもっとも信頼できる同源形式として提示する。いずれの形式もタマン語にはそもそも確認されないか、確認されても同源形式とはいえない。

^{注31} 注37 で後述するように、‘sun’ は ‘eye’ という要素をふくみ、ルイ語群にちかい。

^{注32} (20) の語例は Benedict [1972: 34] にルイ語群の形式を追加したものである。

- b. 類別詞と数詞「一」の辞順 (CL-‘one’ はタイ諸語的)
- c. 否定接頭辞: PLu ***á-** + V + 否定述部
- d. 複数動作主標識: V + PLu ***-kí/hí**
- e. 移動にかかわる助動詞: PLu ***-a** ‘ANDATIVE’, PLu ***-aŋ** ‘COMPLETIVE’

Brown [1911] をみても (21a, d, e) については、資料がない。(21b) については、数詞「一」は確認されるけれども、類別詞が未確認である。(21c) については、4. 新資料で後述するように、タマン語でも **ʔa** であるとわかった。

TB 一般にみられながらも、ルイ語群やジンポー語において特徴的な対応をみせる語彙には ‘salt’ がある。この語は PTB *gry- がルイ語群やジンポー語では破擦音となる。タマン語でも破擦音であり、類似した改新といえる。

- (22) #65 ‘salt’; Ta tsùm; PLu ***cim**(?) < *ryum(?), J tfum³¹; PTB ***g-ryum** (STEDT #2644)

他方、ルイ語群やジンポー語において特徴的な対応をみせながらも、TB 一般にみられる語彙であり、タマン語でも TB 一般とおなじ対応をみせる語彙に ‘moon’ がある。この語は、TB 一般やタマン語では l- で、ルイ語群やジンポー語では t- で対応する^{注33}。この点からみれば、タマン語がルイ語群と特にちかい関係にあるとはいえない。

- (23) #58 ‘moon’; Ta səlɔ; PLu *s-dá < *s-lá; PTB ***s-(g)la** (STEDT #1016)

ルイ語群およびジンポー語で共通するけれども、ほかの TB では (ほぼ) みられない語例として (24) が確認される。

- (24) #18 ‘bear’; Ta s^hap; PLu *k^h-sap, J tsap⁵⁵; PTB —

ジンポー語にはなく、(ほぼ) ルイ語群とのみ共通する語例には (25) がある。

- (25) a. #21 ‘bird’^{注34}; Ta kətʃeksɔ^{注35}; PLu *u-cík-sa; Meithei uchek
 b. #43 ‘go’^{注36}; Ta hɔ; ‘walk/bring’ PLu ***ha**; PTB s-wa BE IN MOTION, GO, COME (STEDT #2774)

^{注33} PTB の *l が t/d になる現象について詳細は Matisoff [2013a] を参照。

^{注34} ジンポー語 Jili 方言で machik という形式が記録されている [Brown 1837: 1033] (倉部慶太氏の教示による)。

^{注35} Ta kɔ- は動物接頭辞。

^{注36} ジンポー語の sa³³ は同源形式かもしれない。だが、音対応が異なる。

タマン語とルイ語群でのみ類似する語構成をもつものに (26) がある。両者ともに ‘sun’ という語の構成要素として ‘eye’ をもつ点に特徴がある^{注37}。

- (26) #71 ‘sun’ Ta *pupek*; PLu *c-mík, C cəmíʔ, K səmíʔ, G səmíʔ, A/Se chamīt, J tʃan³³; PTB *tsyar (STEDT #2753)

以上より、タマン語に（ほぼ）ルイ語群とのみ共通する言語特徴があることはあきらかである。ただし、ルイ語群に属するとする決定的な証拠まではみいだせない。

3.5 ジンポー語との比較

タマン語とジンポー語との同源形式のうち、両者にのみ共通する語彙は確認されない。ジンポー語と共通する語彙は、他の TB 諸語やルイ語群の形式とも共通する。

他の TB 諸語と比較して、タマン語とジンポー語に接頭辞が共通するものが散見される。ただし、いずれの接頭辞も PTB に再構されうるものであり、タマン語とジンポー語のみを特徴づけるとまではいえない。

- (27) a. #5 ‘five’; Ta *məŋɔ*; J *mă³¹ŋa³³*; PTB *l/b-ŋa (STEDT #1306)
 b. #13 ‘arrow’; Ta *p^həlo*; J *pă⁵⁵la⁵⁵*; PTB *g/b/m-la-y (STEDT #2386)
 c. #35 ‘elephant’; Ta *məki*; J *mă³¹kui³³*; PTB *m-gwi(y) (STEDT #2257)

3.6 北ナガ諸語との比較

タマン語と北ナガ諸語とで共通する同源形式は、他の TB 諸語のいずれかとも共通するものがおおい。タマン語と北ナガ諸語にのみ独自に対応する、あるいは特に類似する例は (28) にしめす二例のみである。

- (28) a. #20 ‘big’; Ta *lwag*; PNN *gluŋ
 b. #26 ‘bone’^{注38}; Ta *raŋ*; PTB *g-r(w/y)a(ŋ/k) (STEDT #238), PNN *ra:ŋ, Tangsa *araŋ*

^{注37} Ta の形式は pu と pek からなる複合語である。pek は #36 ‘eye’ の pekkwe の一部である。‘sun’ に ‘eye’ の要素がふくまれることは、ルイ語群の特徴でもある。ただし、ルイ語群では ‘sunshine’ + ‘eye’ という語構成である点が異なる。Matisoff [2013b: 90] は、類似した語構成をもつものとしてインドネシア語の ‘sun’ *mata hari* (eye-day) をあげる。Ta の形式を再考すると、pu はビルマ語の ⟨puu⟩ ‘be hot’ と同源である可能性がある。なお、Ta の pu は Atsi (Zaiwa) *pui⁵¹* ‘sun’ と同源であるかもしれない。

^{注38} 標準ジンポー語では ‘bone’ *ɲra* であるけれども、カチン州北部の Gauri 方言では *ɲraŋ* [Kurabe 2015: 9]、インド・アッサム州の Numphuk 方言では *n⁴raaŋ¹* [Morey 2007] という形式があり、語末の -ŋ が保持されている（倉部慶太氏の教示による）。

ナイン語とビルマ語のみをはなす。30 分ほどの質問時間のなかで、タマン語の語彙をいくつかききだすことができた。質問はほぼすべてビルマ語でおこなわれた^{注41}。ただし、まわりにいた人々が、筆者による質問内容をタイ・ナイン語で老女に説明してくれる場面もあった。以下に提示するタマン語は、声調を無視した簡易音声表記による。

(32) は、老女がおぼえていたタマン語の歌である。どのように分析しうるか不明な部分がおおい。拍子の切れ目で改行した。なお、**附録 2** に譜面をあげた。

(32) a. ʔiʔələyaŋ, ʔiʔələyaŋ

注 歌のはじまりをしめす掛け声のようなものとおもわれる。

b. nənum təhə ʔina hə 「こどもたちは行った」

c. məceiʔcə he 「こどもはどこですか」

注 məceiʔcə が ‘child’ であり、PTB *tsa-n と同源とおもわれる。

d. lə cə ci: 意味不明

e. məceiʔcə, ʔina 「こどもに言った」

f. nam ha mina 「どこに行ったか」

g. hə pi cə 「外に行った」

(33) ~ (38) は、質問をしていくなかで収集できた短文である。

(33) hə ʔəna, hə təyaŋ 「あっちに行った」

注 hə は「行く」。

(34) kʰam sə-nə-kə 「ご飯食べましたか」

注 kʰam が「ご飯」。Bodo akām ‘rice/food’ と同源か。sə は「食べる」。-nə はチャック語で他動詞化や強意をあらわす助動詞である-naʔに通じている可能性がある。

(35) sə-kəʔ 「すでに食べました」

注 sə は「食べる」。

(36) ʔə-sə-wəʔ 「まだ食べていない」

注 ʔə-は否定接頭辞。ルイ語群にもひろく分布する。sə は「食べる」。

(37) sə-nə-kə-ya 「食べました」

注 sə は「食べる」。-nə はチャック語で他動詞化や強意をあらわす助動詞である-naʔに通じている可能性がある。

^{注41} ビルマ語による録音の確認に際しては、加藤昌彦氏にご助力いただいた。

(38) ^hitum ŋo lo 「水さしはどこですか」

注 ^hi はあきらかに「水」。tum は「容器」などをあらわすとおもわれる。ŋo が「どこ」で、lo は疑問文標識か。

(39) ʔəyɔ pe 「どこに置いたか」

注 pe はおそらく「置く」。ʔəyɔ が「どこ」という意味らしい。

(40) wa do 「来なさい」

注 wa は「来る」を意味する。PTB *s-wa BE IN MOTION / GO / COME (STEDT #2774) と同源形式であるとすれば、wo となるはずである。したがって、PTB *s-wa とは同源ではないとかがえる必要がある。なお、do で有声閉鎖音があらわれているのは、拘束形態素の頭子音が語中で有声化したものとおもわれる。

(41) は、老女以外のタマン人がわずかに記憶していた単語である。

(41) a. pi 「薪」 cf. Meithei upi (STEDT)

b. mola^{注42} 「茶」

c. mola so no 「茶を食べなさい」

以上の新資料のうち、これまでにしられていなかった語彙について確実にいえることは (42) のとおりである。

(42) a. 否定辞が ʔə-となる点はレイ語群的である。

b. 「置く」が pe となる点はレイ語群的である。他の TB では「与える」という意味となることがおおい。

5 おわりに

本稿では主として Brown [1911] によるタマン語の形式を再検討した。そして TB 諸語と比較した。先行研究において、タマン語はジンポー語やレイ語群と同一語群に属するとされることがある。実際、否定接頭辞や「行く」、「置く」などの形式は、レイ語群とのみ一致する。また「太陽」の構成要素に「目」をもつ点は、レイ語群と共通する語彙的改新である。さらに、祖形の *gry- が c- に対応する改新はタマン語とジンポー・レイ語群で共通する。ただし、ほかの言語群とも共通する音韻的・語彙的改新も確認される。特に、祖語における高母音のあとで軟口蓋閉鎖音が付加する現象は、

^{注42} Ta-a < PTB *-ak なので、PTB *s-la LEAF / TEA / FLAT THING (STEDT #786 provisional) とは直接的には関係ないと推定される。ただしビルマ語の {lak`phak`} とは関係している可能性がある。

タマン語やガナン語をふくめ、東北インドから上ビルマの TB 系諸言語で散見される。したがって、ルイ語群にのみ属するといえるような決定的な根拠は存在しない。タマン語は、語彙的には TB 諸語のさまざまな語群とむすびつく、一種の「繋聯言語 (link language)」(藪 [1993: 449]) といいうる。

今後は、タマン人がすむタマンディー地方にちかい地域の言語を調査し、タマン語との共通語彙をさぐるものが課題である。

略号一覧

- {A}: A は Brown [1911] による音声表記
- <A>: A は文字表記
- /A/: A は音素表記
- A ~ B: A と B は自由変異
- A ≍ B: A と B は語家族をなす
- A < B: A は B に由来する
- C: 子音
- CL: 類別詞
- G: 介子音
- V: 母音

言語名一覧

- A (Andro: 東北インド) : McCulloch [1859] (表記を一部あらためた)
- B (Burmese: ビルマ) : Brown [1911]
- C (Cak: バングラデシュ) : 筆者による一次資料
- Crl (Chairel: 東北インド) : McCulloch [1859]
- E Naga (Eastern Naga: ビルマ) : Brown [1911]
- G (Ganan: ビルマ) : 筆者による一次資料
- J (Jingpho: 東北インド・ビルマ) : 徐他編 [1983]
- K (Kadu: ビルマ) : 筆者による一次資料
- Kch (Kachin: ビルマ) : Brown [1911] (J とおなじ言語をさす)
- Me (Meithei: 東北インド) : Brown [1911]
- OB (Old Burmese: ビルマ) : Brown [1911] または Nishi [1999]
- PBG (Proto-Boro-Garo: 東北インド) : Joseph and Burling [2006]
- PCN (Proto-Central Naga: 東北インド) : Bruhn [2014] (STEDT)
- PKar (Proto-Karen: ビルマ・タイ) : Luangthongkum [2013] (STEDT)
- PKC (Proto-Kuki-Chin: 東北インド・ビルマ) : VanBik [2009] (STEDT)
- PLB (Proto-Lolo-Burmese: 中国雲南省・タイ・ビルマ) : 主として Matisoff [2003] (STEDT)

- P_{Lu} (Proto-Luish: 東北インド・ビルマ) : 藤原 [2012, 2014b]
- P_{NN} (Proto-Northern Naga: 東北インド) : French [1983] (STEDT)
- P_Q (Proto-Qiangic: 中国四川省) : STEDT
- P_{Tani} (Proto-Tani: 東北インド) : Sun [1993] (STEDT)
- P_{TB} (Proto-Tibeto-Burman) : STEDT
- P_{Tk} (Proto-Tangkhuic: 東北インド) : Mortensen [2012b] (STEDT)
- Se (Sengmai: 東北インド) : McCulloch [1859] (表記を一部あらためた)
- STEDT (Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus)^{注43}
- Ta (Taman: ビルマ) : Brown [1911]
- TB (Tibeto-Burman) : チベット・ビルマ語派への総称
- Tib (Tibetan: チベット) : Brown [1911]
- TL (Tai Long, Shan: ビルマ) : Sao Tern Moeng [1995]^{注44}
- TN (Tai Naing: ビルマ) : 筆者による一次資料

附録 1: Brown [1911] によるタマン語

表記上の注意

- Brown [1911] に掲載される順番に番号をつけた。
- 次の順番で語彙を提示した:
#番号 ‘意味 (English)’; Ta (タマン語形式); TaL (Luce [1985] によるタマン語形式); Brown [1911] にあがる比較形式 (B, Tib, Kch, Kadu など) || ジンポー・ルイ語群の形式 (PLu, C, K, G, J など); PTB などの形式 (主として STEDT による)
なお、ここにあがる語形は、かならずしも同源形式ばかりではない。
- タマン語と同源形式と推定されるものについては、**bold** でしめた^{注45}。
- Brown [1911] にあがる形式は *italic* でしめた。
- Brown [1911] または Luce [1985] の表記を次のようにあらためた: p^ˈ → p^h,

^{注43} <http://stedt.berkeley.edu/~stedt-cgi/rootcanal.pl> (最終確認 2016 年 9 月 3 日)

^{注44} 本稿では、SEAlang Library Shan Dictionary (<http://www.sealang.net/shan/dictionary.htm>) : 最終確認 2016 年 9 月 19 日) でラテン文字表記されたものを使用した。

^{注45} 頭子音や末子音よりも母音の対応を重視した。たとえば#23 ‘blood’ における P_{Tani} の形式は、頭子音だけをみればタマン語と対応しないけれども、母音まで考慮すると同源形式といえるので、**bold** でしめている。また、全体でなく部分的な一致であっても、同源形式としてしめている。たとえば#7 ‘seven’ については、チャック語やジンポー語の形式はほぼ全体がタマン語と同源形式であるけれども、PKC は接頭辞部分のみが同源形式であると推定される。

$t' \rightarrow t^h, k' \rightarrow k^h, \acute{s} \rightarrow s^h$

- Brown [1911] による略号は次のようにあらためた: B. $\rightarrow$ B (Burmese), O.B. $\rightarrow$ OB (Old Burmese), Tib. $\rightarrow$ Tib (Tibetan), Kch. $\rightarrow$ Kch (Kachin/Jingpho), M $\rightarrow$ Me (Meithei), E. Naga $\rightarrow$ E Naga (Eastern Naga)
- 該当する語彙がないばあいには、‘—’ でしめした。
- シャン語からの借用語であるときには、PTB 以下の形式は省略した。
- 出典がしめされていない言語名の形式は、すべて STEDT による。
- 同形が他の項目にもみられる場合には、その旨を明記した。

1. ‘one’^{注46}; Ta *tə*; TaL *tə*; Karen *tö*, B *tít* || PLu *-a, C -a, K -a, G -a, A/Se -ta, J *lă⁵⁵ŋai⁵¹*; PTB *ʔa (STEDT #3540 provisional), PTani *kon, PKC *khat $\approx$ *ʔat $\approx$ *hat, PNN *Ç-*kla*^A, PCN *khaj, PTK *si, PBG *-sha⁴, PLB *ʔ-dik^L, PKar *t-la^T (STEDT #7411)
2. ‘two’^{注47}; Ta *nek*; TaL *nek*; B *hnüt*, Tib *nyi* || PLu *kín, C níŋ, K kléiŋ, G kɛ, A/Se *kīng*, J *ni*³³; PTB *g/s-ni-s (STEDT #2504), PTani —, PKC *niʔ $\approx$ *hniʔ, PNN *ʔ-ni, PCN *a-ni(t), PTK *ni, PBG *[ki]⁴-niŋ, PLB *ʔ-nit $\approx$ *ni², PKar *k-hnej^A
3. ‘three’; Ta *sùm*; TaL *sum*; B *thon*, OB and Tib *sum*, etc. || PLu *súm, C súŋ, K *s^hóm*, G *s^hóm*, A/Se *shom*, J *mă³¹sum³³*; PTB *g-sum (STEDT #2666), PTani *fium, PKC *thum, PNN *Ç-sum, PCN *a-sam, PTK *t^hum, PBG *tham², PLB *sum², PKar *səm^A
4. ‘four’; Ta *pəli*; TaL *pəli*; E Naga *peli* || PLu *prí, C prí, K pí, G pí, A/Se *pī*, J *mă³¹li³³*; PTB *b-ləy (STEDT #2409), PTani *pri, PKC *lii, PNN *bələy, PCN *phV-ləj, PTK *ti, PBG *Brui¹, PLB *b/ʔ-ləy², PKar *lwi-t
5. ‘five’^{注48}; Ta *məŋə*; TaL *məŋə*; Kch and Naga *manga*, B and Tib *nga* || PLu *ŋá, C ŋá, K hà, G hà, A/Se *nga*, J *mă³¹ŋa³³*; PTB *l/b-ŋa (STEDT #1306), PTani *ŋo, PKC *ŋaa, PNN *Ç-ŋa^B, PCN *pha-ŋa, PTK *ŋa, PBG —, PLB *ŋa², PKar *ŋjat^p
6. ‘six’^{注49}; Ta *kwa*; TaL *kwə*; Sengkadong Naga *k^hwòk^hə*, Kadu *kok* || PLu *k-ruk, C kruʔ, K houʔ, G houʔ, A/Se *kok*, J *kɜu[?]*⁵⁵; PTB *d-k-ruk (STEDT #2621), PTani

^{注46} Ta と A/Se は同源形式。だが、A/Se が ‘CL-one’ であるのに対し、Ta は単に ‘one’ である。TaL の母音が ə なのは誤記。

^{注47} *i のあとで k が二次的に付加する例。

^{注48} ルイ語群の形式も Ta と同源。ただし、接頭辞 m-がある J や Naga のほうが Ta にちかい。K/G は Shan からの借用。TL haa³。TaL の語末母音が ə なのは誤記。

^{注49} PTB *-uk vs. Ta -a は不規則な対応。K/G は Shan からの借用。TL hok⁴。

- *krə, PKC *ruk, PNN *d-ruk, PCN *t-ruk, PTK *ruk, PBG *Dok, PLB *C-krok^L, PKar *khrow^A
7. ‘seven’^{注50}; Ta sənè; TaL sənè; Kch *sinit*, Naga *seni*, etc., B *kuhnit* || PLu *s-ni-ŋ, C sənij, K set, G sit, A/Se sīnī, J sǎ³¹nit³¹, PTB *s-ni-s (STEDT #2505), PTani *kV-nūt, PKC *sa-ri?, PNN *Ç-nit, PCN *th-ni(t), PTK *ni, PBG *[ni]⁴, PLB *ʔnit ≈ *si², PKar *hnət / hnwi-t
8. ‘eight’^{注51}; Ta pəsè; TaL pəsè; Kch *masat* || PLu *cat < *ryat, C ʔacai?, K pet, G pet, A/Se chat, J mǎ³¹tsat⁵⁵, PTB *b-r-gyat ≈ *b-g-ryat (STEDT #2259), PTani *pri-ñi, PKC *riat, PNN *Ç-gyat, PCN —, PTK *ʃet, PBG —, PLB *ʔ-rit^L, PKar *khrət^D / grət^D
9. ‘nine’^{注52}; Ta tǎxə; TaL tǎxə; Naga *takhu*, Kch *chaku* || PLu *t-khúw, C tǎhvú, K kàu?, G kò, A/Se tuhu, J tǎ³¹khu³¹, PTB *d/s-kəw, PCN *t-ku (STEDT #2364), PTani *kV-(n)añ, PKC *kua, PNN *Ç-gəw, PCN *t-ku, PTK *ko, PBG *(kh)u¹, PLB *gəw², PKar *khwi^A
10. ‘ten’^{注53}; Ta ʃi; TaL ʃi; Kch *shi*, Tib *chu*, B s^hè, Kadu *shim* || PLu *cí ~ *sí; C cí/jí/sí, K cip, G s^hip, A/Se shêt, shī-, -jī, J ʃi³³, PTB *ts(y)i(y) ~ *tsyay (STEDT #2748), PTani *rjuŋ, PKC *hrea, *soom, PNN *boʼn, *roʼk, PCN *th-ra, PTK *ra, PBG —, PLB *tsay¹, PKar *chej^A
11. ‘ape’^{注54}; Ta jùn; TaL —; — || PLu k-wóy, C kəvú, K kwé, G kwé; A koì, Se halca, J woi³³; PTB *ywan (STEDT #6049), PTani *be, PKC *yoŋ, PNN *woʼy, PCN *ŋa, PTK *joŋ, PBG —, PLB *myuk^L, PKar *joʔ^D
12. ‘arm, hand’; Ta la; TaL la; B *let*, OB *lak*, Kch *lata*, Tib *lagpa* || ‘palm’ PLu *tak-prár, C taʔpráij, K taʔpá, G taʔpá, A takhu, Se tahu, J lǎ³¹taʔ⁵⁵; PTB *lak (STEDT #695), PTani *lak, PKC *kut ≈ *khut, *baan, *yak ARMPIT, PNN *glək, PCN *khat, PTK *k^hut, *paan, PBG *yak, PLB *lak^L, PKar —
13. ‘arrow’; Ta p^həlo; TaL p^həlo; — || PLu —, C léjú, K tǎlèiʔʔus^han, G mats^ha, A/Se mahol, J pǎ⁵⁵la⁵⁵; PTB *g/b/m-la-y (STEDT #2386), PTani *puk, PKC *thal, PNN *la^B dzaʼn, PCN *laʔ BOW, PTK *la, PBG —, PLB *ʔ-dzan¹, PKar *bla^B

^{注50} K/G は Shan からの借用。TL cet⁴。

^{注51} PTB/PLu *-at が Ta では e で対応するようである。K/G は Shan からの借用。TL piet²。

^{注52} PTB *-əw vs. Ta -e は規則的な対応 (#66 ‘snake’)。接頭辞 t-はルイ語群、ナガ諸語、ヌン諸語にあり、ボロ・ガロ諸語にも散見される。K/G は Shan からの借用。TL kaw³。

^{注53} K/G/A/Se は Shan からの借用。TL sip⁴。

^{注54} Meithei yong, Maring (Naga) juŋ などとも同源形式。

14. ‘axe’^{注55}; Ta *wə̀tùṃ*; TaL *wə̀tùṃ*; Atsi *wa* || PLu —, C *poʔtu*, K *páuʔsʰèiŋ*, G *pə̀sʰèiŋ*, A/Se —, J *niŋ*³¹ *wa*³³ ~ *n*³¹ *wa*³³; PTB **r-pʷa* (STEDT #2772), PTani —, PKC **hɾay*, PNN **Ç-wa^A*, PCN **pu*, PTK **hwa*, PBG **ru¹-a*, PLB —, PKar —
15. ‘bag’^{注56}; Ta *tʰùṃbɔ*; TaL *tʰùṃbɔ*; Shan *htung* || PLu **thoŋ(?)*, C *điʔ*, K *ɕiʰáũŋ*, G *sʰiʔtʰáũŋ*, A/Se *thong*, J *n*⁵⁵ *phje*⁵¹
16. ‘bamboo’; Ta *wɔ*^{注57}; TaL *wɔ*; B and Karen *wa* || PLu **kro*, C *kro*, K *ləpouʔ*, G *təpə̀uʔ*, A *ko*, Se *koa*, J *kǎ*⁵⁵ *wa*⁵⁵; PTB **r/g/s-pʷa* (STEDT #2549), PTani **fə̀ɔ*, PKC **rua*, PNN **Ç-wa^B*, PCN **pwa/pu*, **r-hwaʔ*, PTK **hwa*, PBG **bwa²*, PLB **wa²*, PKar **hwa^B*
17. ‘bat’^{注58}; Ta *sə̀ŋpʰula*; TaL *sə̀ŋ-pula*; Yawyin *wala* || PLu —, C *laŋlúʔ*, K *ʔupʰaʔsʰa*, G *lǎŋnú*, A/Se —, J *phǎ*⁵⁵ *tsip*⁵⁵; PTB **ba:k* (STEDT #2146), PTani **pon*, PKC **paa-laak*, **ḡaak*, PNN **Ç-bak*, PCN —, PTK **paak*, PBG **tao²-pak*, PLB —, PKar **pla^{A/B}*
18. ‘bear’; Ta *sʰap*; TaL *sʰap*; Kch *tsap* || PLu **kʰ-sap*, C *lúwaiŋ*, K *kəsʰàp*, G *kəsʰàp*, A/Se *sapmo*, J *tsap*⁵⁵; PTB **d-wam* (STEDT #2777), PTani **tum*, PKC **wom*, PNN **C-gyap*, PCN —, PTK **ŋom*, **him*, PBG **ma³-phur*, PLB **d-wam^{1/2}*, PKar **tham^A*
19. ‘bee’; Ta *ùṃŋ*; TaL *uiŋ*; — || PLu **tʰ-Cún*, C *təlúŋ*, K *təmún* ~ *túŋgún*, G *təmún*, A/Se —, J *lǎ*³¹ *kat*³¹; PTB **s-b-(r/y)añ* (STEDT #2788), PTani **ŋut²* HONEY BEE, PKC **khuay*, PNN **Ç-guay*, **C-na^B(guay)*, PCN **tʃhak*, PTK **kʰoj*, PBG —, PLB **bya²*, PKar **kwat^D* BEE (APIS CERANA), **k-hne* BEE (APIS DOR-SATA)
20. ‘big’^{注59}; Ta *lwaŋ*; TaL *lwaŋ*; Chin *len* || PLu **túŋ*, C *búləliŋ*, K *tóuŋ*, G *tóuŋ*, A/Se *tong*; PTB **ta-y* (STEDT #2697), PTani **tə* ~ **ta*, PKC **lian-II*, *lianʔ-II*, PNN **gluŋ*, PCN —, PTK **dej*, **hak*, PBG **DVr²*, PLB **k-ri(y)²*, PKar **ʔdo^B*
21. ‘bird’^{注60}; Ta *kə̀tʃeksɔ*; TaL *kə̀tʃeksɔ* (sparrow); Andro *ujiksa*, Aimol (Old Kuki) *kache* || PLu **u-cík-sa*, C *ʔusi*, K *ʔusiʔsʰà* ~ *ʔusiʔsʰà*, G *ʔusiʔsʰà*, A/Se *ujiksa*, J *u*³¹ *注61*; PTB **ʔu* (STEDT #301), PTani **taŋ*, PKC **waa*, PNN **wa*, **ua*, **C-*

注55 Chang の *wo* が同源形式とおもわれる。

注56 Shan からの借用語。TL *tʰoŋ¹*。

注57 #37 ‘father’ のひとつとは同源ではなく同音異義である。

注58 TaL は Ta にある有気音を無視している。

注59 頭子音が l- と t- とで対応していると推定される例。

注60 Ta の *-so* は指小辞。#29 ‘cat’ にもある（倉部慶太氏の教示による）。PLu **-sa* と同源。

注61 Jilí 方言では *machik* [Brown 1837: 1033]（倉部慶太氏の教示による）。

- waw, PCN *wa-**zaʔ**, Ptk *wa, *ta, PBG *tao², PLB *s-ŋ(y)ak^H, PKar *tho^B
22. ‘bitter’; Ta xɔ; TaL xɔ; B k^hu, Atsi *hkaw* || PLu *kha, C ha, K ha, G ha, A/Se ha, J kha⁵⁵; PTB *b-ka-(n/m/ŋ) (STEDT #229), PTani *ko ~ *ka:, PKC *khaa-I, khaat ≈ khaak-II, PNN *C-k^ha^B, PCN *a-khaʔ, Ptk *k^ha, PBG *kha², PLB *ka², PKar *kha^B
23. ‘blood’; Ta s^he; TaL s^he; Kch *sai*, Kadu *se* || PLu *se, C se, K s^he, G s^he, A/Se shé, J sai³¹; PTB *s-hywəy-t (STEDT #230), PTani *vi:, PKC *thii, PNN *syi, PCN *a-(h)jəjʔ, Ptk *fi, PBG *thui², PLB *swəy², PKar *swi^B
24. ‘boat’^{注62}; Ta li; TaL li; Kch *li*, B *hle* etc || PLu *hó, C hó, K həlí, G le, A/Se ho, J li³³; PTB *m-ləy (STEDT #2413), PTani *si-pui, PKC *looŋ, PNN *loʔŋ, PCN *a-ruŋ, Ptk *k^hoŋ, PBG *Ruŋ¹, PLB —, PKar *klej^a
25. ‘body’^{注63}; Ta tu; TaL tu; Shan *tu* || PLu *san < sal, C kaiŋtha, K làŋ, G ko, A sampon, Se sal, J tu³¹sat³¹ ‘animal’; PTB *du (STEDT #14), PTani *ui, PKC *tak-shaa, PNN *ʔ-buʔm, PCN *a-maŋ, Ptk —, PBG *han², PLB *guŋ¹, PKar —
26. ‘bone’; Ta raŋ; TaL raŋ; Kch *nra* || PLu *ma(ŋ/k)-kV-k, C ʔáməra, K maʔku, G maŋkuʔ, A/Se mangko, J n³¹ʔa³³; PTB *g-r(w/y)a(ŋ/k) (STEDT #238), PTB *g-ra-t (STEDT #237), PTani *loŋ, PKC *ruʔ, PNN *raʔŋ, PCN *a-rut, Ptk *ru, PBG *kreŋ³, PLB *rəw², PKar *khrwit^D
27. ‘buffalo’^{注64}; Ta mɔk; TaL mɔk (cattle); Kadu *mok* ‘cow’ || ‘cattle’ PLu *s-muk; ‘cattle’ C səmuʔ, K mouʔ, G mouʔ, A sok, Se ngo, J ŋa³³; PTB *muk CATTLE (STEDT #5607), PTani —, PKC *sial, *naa BUFFALO, PNN *teʔk, PCN —, Ptk *muk CATTLE, PBG *ma⁴-su COW, PLB *kway² [Bradley 1979 #8C], PKar *p/b-na^B
28. ‘call’^{注65}; Ta lu; TaL —; — || PLu *(k)o, C ʔo, K kɔ, G kɔ, A/Se hak, J kau³³; PTB *(g/k)aw (STEDT #2235), PTB *r-yuw ASK/REQUEST (STEDT #2799), PTani *grok, PKC *kaw, PNN *ŋyek, PCN *tsaj, Ptk *ho, PBG —, PLB *graw¹, PKar —
29. ‘cat’^{注66}; Ta mətʃeksɔ; TaL mətʃeksɔ; E Naga *mashi* || PLu *hál-ci-k, C háŋ, K

注62 K の形式は PLu *hó が弱化したものが、PTB *m-ləy に由来する lí に付加した形式であると推定される（査読者 B の指摘による）。G は B からの借用。

注63 STEDT によると、PTB の形式がタイ諸語と関連している。TL to¹。なお、J は TL to¹s^hat⁴からの借用語（倉部慶太氏の教示による）。

注64 Ta のみ ‘buffalo’ であり、他言語の同源形式はいずれも ‘cattle’。

注65 Ta に対して適当な同源形式がみあたらない。PTB *r-yuw は頭子音があわない。

注66 Ta の接頭辞は、PTB や PTani、PNN、PTk、PBG と関係するとともに、猫の鳴き声と関

- hançî, G hânsî?, A hanggen, Se haljik; PTB *m/s/-rwaŋ, PTani *mjo TIGER, PKC —, PNN *miaŋ, PCN —, PTK *mi, PBG *mVŋ⁴-kV, PLB *k-roŋ¹, PKar *thu^B CIVET CAT
30. ‘cold’; Ta xam; TaL xɑ:m || PLu *sim, C siŋ, K çim, G s^him, A kan, Se kadeng, J khjen³³ ‘snow’; PTB *kyam (STEDT #2374), PTani *han COLD (WATER), PKC *shik, *wot, PNN *k^hyəm, PCN *a-tshak, PTK *sik, *kow, PBG *sV⁴[k]am, PLB *ʔ-klak^H ≈ *m-klak^H, PKar —
31. ‘dog’; Ta vi; TaL vi; Chin ui, wi || PLu *kuy, C kvu, K ci, G ci, A/Se kī, J kui³¹; PTB *d-kwəy-n (STEDT #1764), PTani *kwi, PKC *ʔuy, PNN *kuəy (kreŋ), PCN *khjəj, PTK *hwi, PBG —, PLB *k^wəy², PKar *thwi^B, *thwi?
32. ‘ear’^{注67}; Ta nəp^hɑ; TaL nəp^hɑ; B and Tib na, Yawyin napaw, Sopvoma (Naga-Kuki) nubbi || PLu *k-ná, C ʔakəná, K kəná, G kəná, A/Se kana, J na³³; PTB *r/g-na (STEDT #811), PTani *ña-ruŋ, PKC *naa ≈ *hnaa, PNN *na^A, PCN *hna?, PTK *na, PBG *na^[1]-cur, PLB *ʔ-na², PKar *na^B
33. ‘earth (soil)’^{注68}; Ta pəkɔ; TaL pəkɔ; — || PLu *ka, C kəjá?, K ka, G ka, A/Se ka, J ka⁵⁵; PTB *r-ka (STEDT #2284), PTani *mroŋ, PKC *lay, PNN *ka^B(tok), *pit, PCN *a-lej, PTK *lej, PBG *ha², PLB —, PKar —
34. ‘eat’^{注69}; Ta sɔ; TaL —; B and Tib sa, Kch sha || PLu *sa, C sa, K you?, G you?, A sha, Se sa, J ja⁵⁵; PTB *dz(y)a-k/n/t/s (STEDT #36), PTani *do, PKC *ʔay, PNN *dza^B, PCN *tsa?, PTK *tsa, PBG *ca², PLB *dža², PKar *ʔam^B
35. ‘elephant’; Ta məki; TaL məki; Kch mǎgwi, Kadu akyi || PLu *kúy, C ʔukvú ~ wvukvú, K ʔəcí, G ʔəcí, A/Se kī, J mǎ³¹kui³³; PTB *m-gwi(y) (STEDT #2257), PTani —, PKC *ɸuy ≈ *wuy, *saay, PNN *loʔk, *C-glaŋ, PCN —, PTK *m-pu, PBG —, PLB *tsaŋ, ʔ-ya³, PKar *k-chaŋ^A
36. ‘eye’^{注70}; Ta pekkwe; TaL pekkwe; — || PLu *mík, C ʔamí?, K míʔtù, G míʔtù,

係しているかもしれない（査読者 B の指摘による）。Ta の主音節は G や Se とやや類似する。ただし、K の語末に閉鎖音がないことを考慮すると、G や Se の語末子音は高母音のあとで二次的に付加したものとおもわれる。ほか、Ta の形式と類似するものには Ao Naga (Chungli) si³tsək³ ‘wild cat’ が確認される。

^{注67} Ta の接頭辞部分は TB に広範に分布する形式。主音節部分は、STEDT によると PTB *r-pak LEAF/LEAF-LIKE PART/FLAT OBJECT (STEDT #821) と同源形式。

^{注68} Ta pə は Rawang ba [LaPolla & Sangdong 2015: 10] と関係しているとおもわれる。

^{注69} PTB の形式は TB で広範に分布する。しかしルイ語群の形式とは対応が不規則。Ta の形式は、ほかの TB の形式よりは、ルイ語群の形式に類似する。ただし、新資料によると ‘eat’ は ɔ のように発音されることもあり、むしろ PTB と同源ということになる。

^{注70} pek は PTB *s-mik と関係する。祖形の *m が Ta では p で対応する平行例に #51 ‘house’

- A/Se *mīt*, J *mjiʔ*³¹; PTB *s-*mik* (STEDT #682), PTani **mik*, PKC **mik*, PNN **me'k*, **mik*, PCN **mjak* ≈ **hmik*, PTK **mik*, *mit*, PBG **muuk-kon*, PLB *s-*myak*, PKar **mɛʔ*^D
37. ‘father’^{注71}; Ta *vɔ* ~ *wɔ*; TaL *vɔ* ~ *wɔ*; Kch, E Naga and Garo *wa*, Kadu *awa* || PLu *a-*wá* (?); C ʔavá, K ʔəwà, G ʔəwa, A *apa*, Se *apo*, J *wa*⁵¹; PTB **wa* (STEDT #5484) ≈ **p^wa* (STEDT #2546), PTani **bo*, PKC **paa*, PNN **pwa*^A, PCN *a-*pwaʔ*, PTK **ba*, PBG **pha*¹, PLB *ʔəpa³ [Bradley 1979 #201], PKar **pha*^A
38. ‘female’; Ta *nēm*^{注72}; TaL *nēm*; Kch *num* || ‘daughter-in-law’ PLu **nám*; C ʔanáŋ, K *nám*, G *nám*, A/Se —, J *nam*³³, *num*³³ ‘woman’; PTB *s-nam DAUGHTER-IN-LAW / WIFE / SISTER (STEDT #2486), *n(y)u FEMALE / MOTHER (STEDT #1621), PTani **nə*, PKC **nuu*, PNN **ɲəw* MOTHER, PCN **la*, PTK **la* DAUGHTER, PBG —, PLB **mi*^{2/3}, PKar **hmi*^B
39. ‘fire’^{注73}; Ta *vè*; TaL *ve*; Shan *fi*, Kachari *wai*, Kch and Kadu *wan* || PLu **wan* < **wal*, C *vaiŋ*, K *wan*, G *wan*, A/Se *wal*, J *wan*³¹; PTB **b^war* ≈ **p^war* (STEDT #2152), PTB **mey* (STEDT #2136), PTani **mə*, PKC **may*, PNN *ʔ-wəɾ, PCN **mej*(ʔ), PTK **mej*, PBG **bwar*², PLB *s/ʔ-mey^A, PKar **hme*^B
40. ‘fish’^{注74}; Ta *ətsɔ*; TaL *ətsɔ*; — || PLu **t^h-ŋa*, C *təna*, K *táŋŋà* ~ *taŋŋà*, G *táŋŋà*, A/Se *tanga*, J *ŋa*⁵⁵; PTB —, PTani **ŋo*, PKC **ŋaa* ≈ **hŋaa*, PNN **ŋya*^B, PCN *a-*hŋaʔ*, PTK **ŋa*, PBG **na*², PLB **ŋa*², PKar **daʔ*^D
41. ‘flesh’^{注75}; Ta *hè*; TaL *he*; Shan *ha* || ‘body/flesh/meat’ PLu **san* < **sal*, C ʔásaiŋ, K *s^həlan*, G *s^həlan*, A *aksəl*, Se *sen* ‘flesh’, *sal* ‘body’, J *jan*³¹; PTB **sya-n* (STEDT #34), PTani **jak*, PKC **s^haa*, PNN **meɾy*, **p^hay*, **swun*, **wur*, PCN *a-*faʔ*, PTK **sa*, PBG —, PLB **xa*² ‘meat’ [Bradley 1979 #135], PKar **hŋa*^B
42. ‘give’^{注76}; Ta *nēm*; TaL *nēm*; — || PLu **i*, C ʔi, K ʔi, G ʔi, A/Se *i*, J *ja*³³; PTB

がある。ルイ語群では K p と G m が対応する例があり、祖形に入破音を再構しうる。しかし、この語例では K も G も m で対応し、祖形に入破音を再構できない。なお、注37も参照。

注71 STEDT には E Naga と Garo に *wa* という形式がない。古形かもしれない。

注72 #42 ‘give’ とは同源ではなく同音異義である。

注73 PLu *-al に Ta -è が対応する並行例に #41 ‘flesh’ がある。

注74 Ta の形式は、PQ *r-dzwa (STEDT #5673) に類似する。

注75 PLu *-al に Ta -è が対応する並行例に #39 ‘fire’ がある。ただし、この語例は頭子音が PTB や PLu などと対応しない。

注76 Ta と類似する例として Chairel *num* がある。なお、#38 ‘female’ とは同源ではなく同音異義である。

- *ya-k (STED #3549), PTani *bi, PKC *pia-I, piak-II, PNN *C-la^B, *gow, *p^ha, PCN —, PTK *mi, PBG *ron², PLB *bəy², PKar —
43. ‘go’; Ta **hɔ**; TaL hɔ; — || ‘walk/bring’ PLu ***ha**; C **ha**, K **ha**, G **ha**, A **laha** ‘bring’, shai ‘walk’, Se la **ha** ‘bring’, sa ‘walk’, J sa³³ ‘go/come’; PTB s-wa BE IN MOTION, GO, COME (STEDT #2774), PTani *in, PKC *kal, *θeʔ, PNN *ga^A, PCN *wa, PTK *wa, PBG —, PLB *ʔay¹, PKar *lwe^A
44. ‘gold’^{注77}; Ta **xam**; TaL xam; Siyin and E Naga **kham**, Shan *ka*, Chinese *kin* || PLu —, C ʃwe, K ɲón, G ɕwe, A/Se kɛngtunong, J tʃa³¹
45. ‘good’^{注78}; Ta **kəmə**; TaL kəmə; Shan *hkam* || PLu ***méy**, C **mí**, K **mé**, G **mé**, A/Se —, J **mai**³³; PTB ***mway** BEAUTIFUL (STEDT #2457), PTani *kaŋ-pro BEAUTIFUL, PKC ***mooy** BEAUTIFUL, PNN ***maʔy**, PCN —, PTK *p^hra, PBG *nam, PLB *ʔ-na¹, *m-d(y)ak, PKar —
46. ‘grass’; Ta **s^hèiŋ**; TaL s^heiŋ; Kch **tsing** || ‘live’ PLu ***séŋ**(?) < ***syán**(?), C **síŋ**, K **s^hèiŋ** ~ ʔəs^hèiŋ, G **s^háiŋ**, A **seng**, Se **sheng**, J **tsiŋ**³³ ‘grass’; PTB ***s-riŋ** ≈ ***s-r(y)aŋ** LIVE/ALIVE/GREEN/RAW/GIVE BIRTH (STEDT #71), PTani —, PKC ***hriŋ**-I, hriŋ-II ALIVE, PNN ***Ç-criŋ**, PCN *a-ʒa(?), PTK ***hriŋ** ALIVE, PBG *sam¹, *thaŋ¹ ALIVE, PLB ***tsiŋ**² LIVE, PKar —
47. ‘head’; Ta **kəkə**; TaL kəkə; Me **kok**, Tib **go** || PLu ***hów** < ***khów**, C ʔahú, K həláj, G həlájŋùʔ, A/Se hurɛŋ, J khaʔ³¹**khu**⁵⁵ ‘upstream’; PTB *m/s-**gaw** (STEDT #386), PTani *dum, PKC *luu, PNN ***k^how**, PCN ***ku**, PTK ***kow**, PBG ***kho**⁴-rok, PLB *ʔu², PKar *kləʔ^D
48. ‘hill’; Ta **kəuŋrwe**; TaL kəuŋrwe; Kch **kawng**, Tib *ri* || ‘mountain’ PLu —, C təgó, K kəya, G s^heiʔ, A/Se **kontak**, J **koŋ**³¹ ‘hill’; PTB *s-gaŋ (STEDT #3581), PTani *di, PKC *mual, *klaaŋ, PNN ***C-koʔŋ**, PCN —, PTK *p^huŋ, PBG *ha²-cu, PLB *kaŋ¹ [Bradley 1979 #312], PKar —
49. ‘hog’; Ta **va** ~ **wa**; TaL va ~ wa (pig); Kch **wa**, B **wet**, OB **wak**, Kadu **wag** ||

^{注77} Ta はシャン語からの借用。TL k^ham⁴ を借用している TB は散見される。たとえば、Tiddim kham³, Nocte kam, Pyen kham³¹, Proto-Loloish *kam²¹, Pa-O khām などがある。またジンポー語にも khám ‘gold leaf’ という形式で借用されている（倉部慶太氏の教示による）。なお、Brown [1911] によるシャン語 *ka* は、‘go’ をあらわす kwaa² を意図している可能性がある。本来は#43 ‘go’ であげるべきところ、まちがって ‘gold’ にあげていると推定される。なぜなら、次例の ‘good’ に対して、‘gold’ を意味するシャン語をあげているからである。

^{注78} Brown [1911] によるシャン語の *hkam* は ‘gold’ を意味する。本来は#44 ‘gold’ に対してあげるべきものである。

- ‘pig’ PLu *wak, C vaʔ, K waʔ, G waʔ, A/Se wak, J waʔ³¹; PTB *p^wak (STEDT #1006), PTani *rjek, PKC *wok, PNN *wak, PCN —, PTK *hwok, PBG *bwak, PLB *wak^L, PKar *thoʔ^D
50. ‘horse’^{注79}; Ta *tʃipòùk*; TaL tʃipɔuk; Siyin *shipu*, Maring Naga *sapuk*, Kadu *sabu* || PLu *s^H-pu-k, C məráŋ, K s^həpù, G s^həpùʔ, A/Se shuruk; J kum³¹ʒa³¹; PTB *s/m-raŋ (STEDT #1431), PTani *ku < Indo-Aryan, PKC *raŋ, PNN *koʔy, PCN —, PTK *kol < Indo-Aryan, PBG —, PLB *mraŋ², PKar *k-sre^T
51. ‘house’^{注80}; Ta *fɪp*; TaL fɪp; Tangkhul Naga *shim* || PLu *kím, C kíŋ, K cém, G cím ~ kím, A/Se kem; PTB *k-y(i/u)m (STEDT #1612), PTani —, PKC *ʔim, PNN *kium, PCN *a-jam, PTK *jim, PBG *nok, PLB *yim¹, PKar —
52. ‘I’^{注81}; Ta *ně*; TaL ně; B *nga* || PLu *ŋa, C ŋa, K ŋa, G ŋa, A/Se nga, J ŋai³³; PTB *ŋa-y ≍ *ka (STEDT #2530), PTani *ŋo, PKC *kay ≍ *kay-maʔ, PNN *ŋa^A, PCN *aj, PTK *ʔi 1ST PERSON, PBG *aŋ¹, PLB *C-ŋa¹ [Bradley 1979 #438], PKar —
53. ‘iron’^{注82}; Ta *ja*; TaL ja; Tib *chag*, Garo *ser*, Kadu *sin* || PLu *sen < *selʔ, C siŋ, K s^hen, G s^hen, A sên, Se sél; PTB *l-tsyak (STEDT #6365 provisional), PTani —, PKC *thiir, PNN *yaʔn, PCN *jən, PTK *t^hur, *ri, PBG *sur¹, PLB *xam¹ [Bradley 1979 #403], PKar *thaʔ^P
54. ‘kill’; Ta *səshèùk*; TaL —; Kch and OB *sat* || PLu *—, C kəʔfaiʔ, K tánɕí, G kaps^hí, A ca-si, Se kɔp-sī, J sat³¹; PTB *g/b-sat (STEDT #1018), PTani *man, PKC *that-I, *thaʔ-II, PNN *ʔ-sot, PCN —, PTK *t^hat, PBG —, PLB *C-sat, PKar —
55. ‘know’; Ta *tʃùp*^{注83}; TaL —; — || PLu *—, C fé, K míŋs^həhà, G míŋŋə, A isa, Se iksha, J tʃe³³; PTB *syey-s (STEDT #2670), *m-kya(ŋ/n) (STEDT #1229), PTani *ken, PKC *thay-I, *thayʔ-II, PNN *C-k^hej, *C-yəʔy, PCN *m-thəʔ, PTK *t^hej, PBG *si⁴, PLB *šey^{2/3}, PKar —

^{注79} ビルマ・アラカン州の Sak として Hodgson [1853: 5] には sapú が記録されている。Ta や G の形式は、高母音のあとで閉鎖音が付加しているものと推定される。

^{注80} 祖形の *m が Ta では p で対応する平行例として #36 ‘eye’ がある。

^{注81} TB で広範に分布する頭子音は ŋ である一方、Ta では n である点が特異である。n で対応するものは、東北インドではなされる Ao (Chungli) ni, Sema (Naga) ni, Mikir ne などがある。以下追記: いずれも前舌母音をもつ。

^{注82} Ta -a < PTB *-ak なので、PTB *l-tsyak が同源と推定される。PTB *sya:l ≍ *syi:r (STEDT #2673) は、母音の対応に難点がある。

^{注83} 適当な同源形式が確認できない。追記。

56. ‘man (human being)’^{注84}; Ta **mek**; TaL mek; Tib, Shonshe Chin and E Naga **mi**; PL*^{C^H}-tik-(sa), C lú, K təmìs^ha, G tìʔs^ha, A tìksahora, Se tìkhora, J mā³¹ʃa³¹; PTB *r-mi(y)-n (STEDT #1002), PTani *mi, PKC *mii, PNN *C-məy, PCN *a-[h]məjʔ, PTK *mi, PBG *mV⁴-Sa, PLB —, PKar *khwa^A
57. ‘male’^{注85}; Ta **laktʃaj**; TaL lak tʃaj;— || PLu *-la; C -la, K -la, G -la, A/Se —, J la³³; PTB la (STEDT #1624), PTani —, PKC *paa, PNN *la^A, *la^B, PCN *puŋ MALE (OF ANIMALS), PTK *ba, PBG *mV⁴-Sa, PLB *ʔ-pa² [Bradley 1979 #173], PKar *khwa^A; TL luk³tsaaj⁴ ‘male child’
58. ‘moon’^{注86}; Ta **səlo**; TaL səlo; Lushai **thla**, B and Karen **la**, Kadu **sada** || PLu *s-dá < *s-lá, C sədá, K s^hətá, G s^hətá, A/Se satha, J ʃǎ³³ta³³; PTB *s-(g)la (STEDT #1016), PTani *po-lo, PKC *khlaa, PNN *gla poy, PCN —, PTK *caaj, PBG —, PLB *s/ʔ-la³, PKar *ʔla^A
59. ‘mother’^{注87}; Ta **nēm**; TaL nēm; Kch **mu**
60. ‘name’^{注88}; Ta **təmej**; TaL təmej; Me **ming**, Thādo (Chin) **min** || PLu *—, C ʔamíj, K name, G naŋmi~naŋme, A/Se —, J mjiŋ³³; PTB *r-mi(ŋ/n) (STEDT #2450), PTani *muun ~ *mruij, PKC *miŋ ≍ *hmiŋ, *min ≍ *hmin, PNN *min, PCN *a-miŋ, PTK *miŋ, PBG *muŋ¹, PLB *ʔ-miŋ^{1/3}, PKar *min^A
61. ‘night’^{注89}; Ta **nətaŋ**; TaL nətaŋ; Kadu **natkyet** || PLu *nak, C naʔtaiʔ, K naʔce, G naŋki, A/Se sanak, J ʃǎ³¹naʔ⁵⁵; PTB *s-nak BLACK (STEDT #2483), PTani *jo, PKC *nak BLACK, PNN *C-pak BLACK, PCN *a-njak BLACK, PTK *ja, PBG *phwar¹, PLB *s-nak^H, PKar —
62. ‘river’^{注90}; Ta ‘word for water used’; TaL —

注84 *i のあとで k が二次的に付加する例。

注85 ルイ語群や J の形式は「おんどり」の接尾辞として確認される。Ta はシャン語からの借用語と推定される。なおシャン語の-aaj が-ŋ をともなって借用される現象は、K にも確認される: ‘rabbit’ K páŋtáŋ < TL paaj¹taaj⁴

注86 注33を参照。

注87 #38 ‘female’ とおなじ単語。なお Kch (J) に mu という形式は確認されていない（倉部慶太氏の教示による）。

注88 TB で広範に分布する形式。ただし、接頭辞 t を共有するのは中央ナガ諸語とギャロン諸語の一部にかぎられるようである。

注89 Ta の形式は ‘night’ (PLu *nak) と ‘dark’ (PLu *thán) が複合した形式かもしれない: ‘dark’ PLu *thán, C t^hán, K t^hán, G t^hán, A mīt tang(?) ‘blind’, Se —, J tʃaj³³ ‘black’; PTB *tsya(k/ŋ) (STEDT #2683)

注90 #73 ‘water’ と同形式がもちいられる。この点はジンポー語とも共通する（倉部慶太氏の教示による）。

63. ‘road’; Ta **lam**; TaL lam; B, Kadu, Tib etc **lam** || PLu ***lám**, C **láj**, K **lám**, G **lám**, A **lam** je ‘far’, Se **lam** ja ‘far’, J **lam**³³; PTB ***lam** (STEDT #1017), PTani ***lam**, PKC ***lam**, PNN ***lɛm**, PCN ***la:m**, PTK ***foŋ**, PBG ***lam**¹, PLB ***ʔəlam**³ ‘where’ [Bradley 1979 #433], PKar —
64. ‘rock’^{注91}; Ta **taŋpɔ**; TaL taŋpɔ (stone); — || ‘stone’ PLu ***t^h-luŋ**, C **təluŋ**, K **təluŋ**, G **təluŋ**, A/Se **torong**, J **n³¹luŋ**³¹; PTB ***r-luŋ** STONE (STEDT #1269), PTani ***luŋ**, PKC ***luŋ**, PNN ***C-luŋ**, PCN ***luŋ**, PTK ***luŋ**, PBG ***loŋ**², PLB ***k-lok** ≈ ***k-loŋ**, PKar ***loŋ**^B
65. ‘salt’; Ta **tsùm**; TaL tsum; Kch **jum**, Kadu **sum**, Me **thum** || PLu ***cim**(?) < ***ryum**(?), C **ciŋ**, K **sum**, G **sum**, A/Se **chum**, J **tfum**³¹; PTB ***g-ryum** (STEDT #2644), PTani ***lo**, PKC ***tsii**, PNN ***cum**, PCN ***maj**, PTK ***ci**, PBG ***sum**³, PLB —, PKar ***sa**^B
66. ‘snake’^{注92}; Ta **pɛ**; TaL pɛ; Kadu **kap^hu** || PLu ***k-phúw**, C **kəhvú**, K **kəp^hú**, G **kəp^hú**, A/Se **kuphu**, J **lǎ³³pu**³³; PTB ***bəw** (STEDT #2178), PTani ***bu**, PKC ***ruul**, PNN ***ʔ-bəw**, PCN ***ph-rə**, PTK ***ruul**, PBG ***cu**⁴-**pu**, PLB ***bəw**², PKar ***row**^B
67. ‘silk’^{注93}; Ta **nè**; TaL —; Shan *lai* or *nai*, Kch *lai* || PLu —, C **púri**, K —, G **póthè** (< Wrb), A/Se —, J **lai**³³
68. ‘speak’^{注94}; Ta **t^hè**; TaL —; Atsi *dai*, B *tè* (particle), Kadu *tutabauk* || PLu *—, C **pri**, K **təpáu?**, G **təpáu?**, A/Se **na**, J **tsun**³³; PTB —, PTani *(b/m)an, PKC —, PNN ***t^huŋ**, PCN —, PTK —, PBG —, PLB —, PKar —
69. ‘star’^{注95}; Ta **taŋpɛ**; TaL taŋpɛ; — || PLu ***s-kán-si** < ***s-kár-si**(?), C **səkáŋsi**, K **ʔuluɕi**, G **ʔunuŋs^hi**, A/Se **sangansī**, J **ǎ³³kan**³³; PTB ***s-kar** (STEDT #2300), PTani ***kar**, PKC ***ʔaar-θii** ≈ ***-sii**, PNN ***dzi**, PCN —, PTK ***ra**, ***la**, PBG ***[ha⁴-tV-khi]**, PLB ***ʔ-grəy**¹, PKar ***cha**^B
70. ‘steal’^{注96}; Ta **xɛlɔ**; TaL xɛlɔ; B **k^ho** \ || PLu ***kuw-k**, C **kvu**, K **ku**, G **ku?**, A/Se

注91 #69 ‘star’ と同一形式であり、本来は taŋpɛ であると推定される。TB のなかでは Sulung **kə³³po**¹³³ が類似する。

注92 PTB ***-əw** が Ta **-ɛ** で対応するのは規則的 (#9 ‘nine’)。

注93 注27 を参照。

注94 Ta は Dimasa **thi** と同源形式であるようにおもわれる。

注95 Ta の **-pɛ** は PTB ***pu** BALL (STEDT #1275) と同源形式と推定される。#64 ‘rock’ にみられる **-pɔ** も、「まるいもの」という意味と関連しており、本来は **-pɛ** であった可能性がある。つまり、Ta の ‘rock’ と ‘star’ は同一であるとおもわれる。

注96 Ta の形式は PTB ***r-kəw** に、PLu ***la** ‘take’ がついた形式ではないかとおもわれる。

- kuk**, J lǎ³¹ku⁵⁵; PTB *r-kəw ≈ *hu (STEDT #2365), PTani *pjoŋ, PKC *m-ru:k, PNN *C-kəw, PCN *a-hu, PTK *li, PBG —, PLB *kəw², PKar *how^B
71. ‘sun’^{注97}; Ta *pupek*; TaL *pupek*; Kadu *samet* || PLu *c-mík, C cəmíʔ, K səmíʔ, G səmíʔ, A/Se chamī́t, J tʃan³³; PTB *tsyar (STEDT #2753), PTani *ñi, PKC *nii, PNN *cər, PCN *nəj, PTK —, PBG *sal¹, PLB *ʔnəy^{1/3}, PKar *mi^B
72. ‘tooth’^{注98}; Ta *vakòùn*, *wakòùn*; TaL *vaikoun*, *waikoun*; Garo *wagam*, E Naga *va*, Kch *wa* || PLu *s-wá, C ʔasəvá, K s^hwá, G s^hwá, A sho, Se shoa, J wa³³; PTB *s/p-wa (STEDT #632), PTani *fi:, PKC *haa, PNN *swa^B, PCN *p-hwa, PTK *ha, PBG *phwa¹-Gam, PLB *swa², PKar —
73. ‘water’; Ta *thi*; TaL *thi*; Chin *ti*, *tui*, Garo and E Naga *ti*, Karen *hti*, Tib *ch’u* || PLu *wé, C vé ‘rain (v)’, K wé, G wé, A/Se mè, A okwe ‘gravy’, J n³¹tsin³³; PTB *rəy (STEDT #1013), *m-t(w)əy-n ≈ *m-ti-s (STEDT #298), PTani *si, PKC *tuy, PNN *təy, PCN *rwa/ru, *a-tʃə, *ki, PTK *di, PBG *tui¹, PLB *rəy¹, PKar *thej^A
74. ‘write’^{注99}; Ta *rek*; TaL —; B *ye*\, OB *re*\, Hindustani *likh* || PLu *—, C rwé, K ʔəc^hin, k^hù, G yé, A/Se —; PTB *b-rəy DRAW/MARK/BOUNDARY (STEDT #2616), PTani *fat¹, PKC —, PNN —, PCN *a-rəjʔ BOUNDARY, BORDER, PTK —, PBG —, PLB *rəy^{1/3}, PKar —
75. ‘year’^{注100}; Ta *kèiŋ*; TaL —; Chin *kun* || PLu *niŋ, C səniŋ, K yàʔniŋ ‘this year’, G yəniŋ pí ‘this year’, A/Se kum, J ʃǎ³¹niŋ³³; PTB *s-ni(:)ŋ ≈ *s-nik (STEDT #2501), *kum (STEDT #6165 provisional), PTani *ñiŋ, PKC *kum, PNN *paŋ, PCN *niŋ, *a-kam, PTK *kum, PBG *kha⁴-IV LAST YEAR, PLB *s-nik^H [Bradley 1979 #477A], *C-kok^L [Bradley 1979 #477B], PKar *hneŋ^B

^{注97} 注37を参照。

^{注98} Ta -kòùn は、TL k^hew³ ‘teeth’ が関係しているかもしれない。

^{注99} *i のあとで k が二次的に付加する例。‘write’ は OB *riy* である [Nishi 1999: 39]。なお、C はマルマ語、G はビルマ語からの借用語。

^{注100} Ta との同源形式が未確認である。

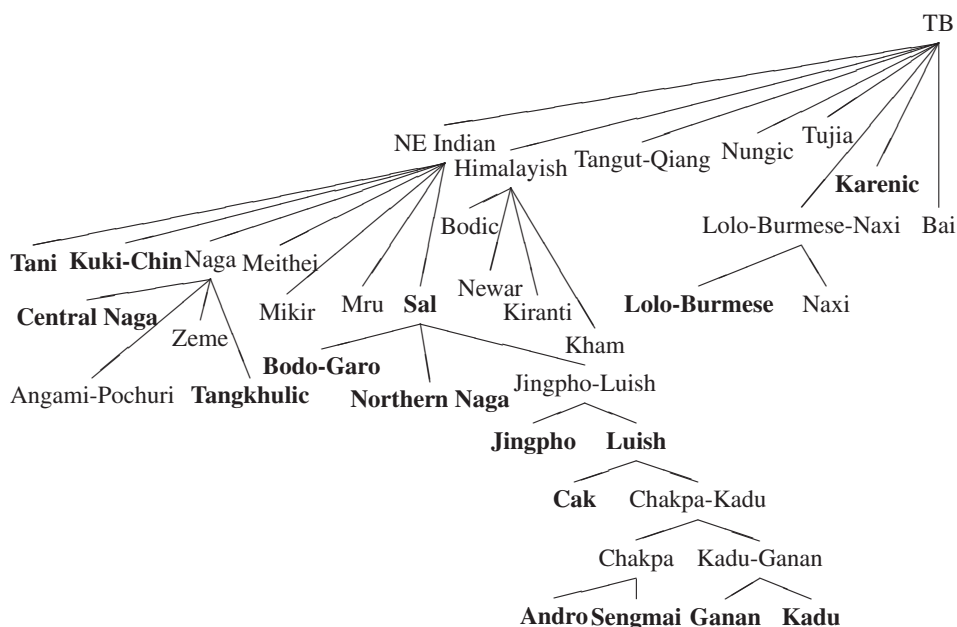
附録 2: 新資料の歌

次にあげるものは、(32) でしめしたタマン語の歌の譜面である^{注101}。

ʔi ʔələyaŋ ʔi ʔələyaŋ nənum təhə ʔinahə məceiʔ cə
 he ləcə ci məceiʔ cə ʔi na namhaminahopi cə

附録 3: TB 系統樹

以下の系統樹は STEDT による分類から主要な部分を抜粋し、一部は改変したものである。STEDT の Jingpho-Asakian は Jingpho-Luish とし、この言語群については筆者のかんがえにしたがって下位分類をしめた。また、**附録 1** でとりあげた主要な言語または言語群については**太字**でしめた。



^{注101} 採譜はスコア・クリエイションに依頼した。なお、語境界はかならずしも (32) と一致しない。

参考文献

【日本語文献】

澤田英夫 (2001) 「ビルマ文字のローマ字転写方式 (澤田式)」

(<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf> : 最終閲覧 2016 年 11 月 7 日)

藤原敬介 (2012) 「ルイ祖語の再構にむけて」『京都大学言語学研究』 31: 25–131.

藤原敬介 (2014a) 「チャイレル語の系統再考」『日本言語学会第 148 回大会予稿集』
272–277.

藤原敬介 (2014b) 「ルイ祖語の再考」『京都大学言語学研究』 33: 1–32.

藪 司郎 (1993) 「ルイ語群」、亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第 5 巻
【補遺・言語名索引編】』東京: 三省堂、pp. 448–449.

【漢語文献】

徐悉艰・肖家成・岳相昆・戴庆厦 (編著) (1983) 『景汉辞典』昆明: 云南民族出版社.

【その他の言語の文献】

Benedict, Paul K. (1972) *Sino-Tibetan: a conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bradley, David (1979) *Proto-Loloish*. London: Curzon Press.

Brown, N. (1837) Comparison of Indo-Chinese languages. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 6: 1023–1038.

Brown, R. Grant (1911) The Tamans of the Upper Chindwin, Burma. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 41: 305–317.

Brown, R. Grant (1913) *Burma gazetteer: Upper Chindwin district, volume A*. Repr. Rangoon 1960: Superintendent Govt. Printing and Staty., Union of Burma.

Bruhn, Daniel W. (2014) A phonological reconstruction of Proto-Central Naga. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley.

Burling, Robbins (1983) The Sal languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 7(2): 1–32.

Damant, G. H. (1880) Notes on the locality and population of the tribes dwelling between the Brahmaputra and Ningthi rivers. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series* 12: 228–258.

Devi, Lairenlakpam Bino (2002) *The Lois of Manipur (Andro, Khurkhul, Phayeng and Sekmai)*. New Delhi: Mittal Publications.

French, Walter T. (1983) Northern Naga: a Tibeto-Burman mesolanguage. Ph.D. Dissertation, The City University of New York.

- Grierson, George A. (ed.) (1904) *Linguistic survey of India, Vol. III, part III, Kuki-Chin and Burma groups*. Repr. Delhi 1994: Low Price Publications.
- Hodgson, Brian Houghton. (1853) On the Indo-Chinese borders and their connexion with the Himálayans and Tibetans. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 22: 1–25.
- Joseph, U. V. and Robbins Burling (2006) *The comparative phonology of the Boro-Garo languages*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.
- Kurabe, Keita (2015) The loss of the proto-velar finals in Standard Jingpho. Paper presented at the 25th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, Payap University, Chiang Mai, Thailand.
- LaPolla, Randy J. and David Sangdong (2015) *Rawang-English-Burmese dictionary (A Tibeto-Burman language spoken in Myanmar)*. Privately published for limited circulation.
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.) (2016) *Ethnologue: Languages of the World, Nineteenth edition*. Dallas, Texas: SIL International, Online version: <http://www.ethnologue.com>. (2016 年 9 月 2 日閲覧)
- Li, Fang Kuei (1977) *Handbook of comparative Tai*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- Lowis, C. C. (1919) *The tribes of Burma*. Rangoon: Office of the Superintendent, Government Printing, Burma.
- Luangthongkum, Theraphan (2013) *A view on Proto-Karen phonology and lexicon*. (unpublished ms. contributed to STEDT).
- Luce, G. H. (1985) *Phases of Pre-Pagán Burma: languages and history*, vol. I, II. Oxford: Oxford University Press.
- Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: system and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Matisoff, James A. (2013a) The dingui's dilemma: regular and sporadic l/d interchange in Sino-Tibetan and elsewhere, In Tim Thornes, Erik Andvik, Gwendolyn Hyslop and Joana Jansen (eds.) *Functional-historical approaches to explanation: in honor of Scott DeLancey*. [Typological studies in language vol.103], Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 83–104.
- Matisoff, James A. (2013b) Re-examining the genetic position of Jingpho: putting flesh on the bones of the Jingpho/Luish relationship. *Linguistics of the Tibeto-Burman*

- Area* 36(2): 1–106.
- McCulloch, Major W. (1859) *Account of the valley of Munnipore and of the hill tribes; with a comparative vocabulary of the Munnipore and other languages*. Selections from the Records of the Government of India (Foreign Department). No. XXVII. Calcutta: Bengal Printing Company Limited.
- Morey, Stephen. (2007) Draft dictionary, Singpho (Numhpuk Hkawng) – English. ms.
- Mortensen, David R. (2004) The emergence of dorsal stops after high vowels in Huishu. *Berkeley Linguistics Society* 30: 292–303.
- Mortensen, David R. (2012a) The emergence of obstruents after high vowels. *Diachronica* 29(4): 434–470.
- Mortensen, David R. (2012b) *Database of Tangkhulic languages*. (unpublished ms. contributed to STEDT).
- Nishi, Yoshio (1999) *Four papers on Burmese: toward the history of Burmese (the Myanmar language)*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Sao Tern Moeng (1995) *Shan-English dictionary*. Kensington, Maryland: Dunwoody Press.
- Shafer, Robert (1974) *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Sun, Jackson (1993) A historical-comparative study of the Tani (Mirish) branch in Tibeto-Burman. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley.
- VanBik, Kenneth (2009) *Proto-Kuki-Chin: a reconstructed ancestor of the Kuki-Chin languages*. STEDT Monograph Series No. 8. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.

(附記)

本稿は科学研究費補助金（課題番号 16K02691）による研究成果の一部である。また本稿は、日本歴史言語学会第 4 回大会（2014 年 11 月 30 日、国立民族学博物館）、第 72 回言語記述研究会（2016 年 5 月 8 日、京都大学文学部）、2016 年ビルマ研究会（2016 年 5 月 15 日、京都大学稲盛財団記念館）での発表資料に加筆・修正したものである。

On the genetic position of Taman reconsidered

HUZIWARA Keisuke

Abstract

Taman is a Tibeto-Burman language once spoken in and around Htamanthi, Upper Burma. Taman materials are limited to only a list of 75 words recorded in Brown [1911]. On the basis of these vocabularies, Taman is usually believed to be a language closely related to Jingpho or Luish languages [Benedict 1972, Shafer 1974].

It is true that now almost all the Taman people speak only Burmese and Tai Naing (a variety of Shan spoken in Upper Burma, also known as Red Shan). However, in my last visit to Htamanthi in 2015, I met a Taman old woman who still remembered some words in Taman. Although she has forgotten almost everything about the Taman language, she has managed to recall some basic expressions as well as one short song in Taman.

In this paper, I have examined these new materials as well as old ones recorded in Brown [1911] to decide the genetic position of Taman within Tibeto-Burman.

The findings in this research can be summarised as follows.

1. Following phonemes can be postulated in Taman: /a, e, ɛ, i, ɪ, v, o [ɔ, ɑ], u, ə; p, p^h, t, t^h, c [ts, tʃ], k, m, n, ŋ, r, l, s (s^h), ʃ, x, h, w (v), y/
2. There are five striking innovations from PTB to Taman: (a) raising of low vowels (PTB *-a > Taman -ɔ), (b) fricativization of velar stops in word-initial positions (PTB *-k- > Taman x-), (c) loss of velar stops in word-final positions (PTB *-ak > Taman -a), (d) addition of velar stops after high vowels (PTB *-i/-u > Taman -ek/-ouk), and (e) affrication of *gry- (PTB *gry- > Taman c-).
3. It is possible to point out some characteristic words which can be found almost only in Luish and Taman such as a negative prefix (Proto-Luish *-a-, Taman ?ə-), PUT (Proto-Luish *péy, Taman pe) and GO / WALK (Proto-Luish *ha, Taman hɔ) as well as the lexical innovation of ‘sun’ in which ‘eye’ is included. Still, it is hard to tell whether Taman is Luish or not.
4. Taman can be labelled as a “link language” as it contains various types of vocabularies found in different branches of TB languages in and around North-eastern India and Upper Burma.

Keywords: Taman, Tibeto-Burman, Luish, comparative linguistics, link language

受領日 2016年9月18日
受理日 2016年11月26日